

いのちのそこにあるもの

群

青

おもい

うすみずいろのわきみずの
つきぬおもいのわきみずの
むねのおくそこふちふかく
かれるもしらずわきあふれ
すずかぜよせるきしのべの
ゆるれるよしにながかみの
ひとりこごえでうたうひと
ひとりあそびのおもかげが

ときはるばるとさりゆくも
おもいはつきぬみずのいろ
ゆるのひかりにゆれるかみ
かすかにのこるうたのこえ

おもいのままにりようのてを
のばせばするりときはにげ
さらにのばせばむなしくも
こがれただようやみのはて

わずかなことばかわしたひ
きえることなくみずふかく
いまなおそこにゆらめいて
そぞろにあるくかわのきし

やがてかたむきおちるひの
もえたちまちははてるとも
こころこのみをはなれても
ながれたやさぬいずみかな

もえつきること

まぼろしとしりつつおうて
きしきしとゆらぐまいにち
あやうさにみをさらすこと
ひそやかなむねのさざなみ
もえつきてきえるたいよう
おいはてのいのちそのま
いろあせたたたみにすわり
おわりゆくこどうにふれて
ものいわぬひとのまぼろし
ありありとそばにめをとじ
よこたわりかすかにぬく
いきづかいいつまでもきく
おいのいまあるこのみ
ものいわぬしずかさがいい

まぼろし

おもいでさえもおおざけて
かさねあうてとのふるえ
ゆうやけがふたりをもやし
もえつきてほねがいくつか
つきのあかりにしらじらと
うちころがつてときをへて

あけやらぬつゆにしとどの
くさのはらゆめまださめず
いろあさくきりはながれて
はてもなくただようおもい
おもうままだおもうま
はてのないおもいのままに

くるしみはくるしみのまま
かなしみはかなしみのまま

きえることひとときもなく
そこにあるひとのおもかげ
くさふかいあさのひかりに
つつまれてそぞろにあゆむ

まぼろしのきおくたぐれば
かすかにもにおいただよ
かさねあうてのぬくもりに
ことばなくなみだあふれて

このままでこのままでいい
ちのくだのふくらみにふれ
このままでこのままいよう
かなしみとよろこびのまま

やがてくるおわりするときも
ともにするおもいこのまま

そらいろのなみだあふれて
あふれるままにそのままに

悲しみの音

磯をうつ波は鳥たちの喉音
赤い岩がすすり泣いている
風が子守唄を運んでくるが
何も言わない砂浜

晒されている骨
思いのすべて
捨て去ろうとするものすべて
それでも残るものすべてとして
晒され続ける骨ひとつ

別れのむこう
穏やかな日差しの中

消えてしまったはずの
まぼろしの
わずかな甘いゆらぎが見えた

ひたひたと夜をひたす悲しみ
暑さの解けぬ小部屋をひたし
よどんであえぐわたしをもひたし

とげられることのない思いは行きまどい
人の住まぬ軒先に鳴り止まぬ風鈴
渦巻いて沈みこむ灼けた窪地の風となり

とげられぬことが悲しみであるなら
とげられたのちの悲しみは何であるのか
終わりのない悲しみ

悲しみよ
薄青い空の色にわたしを包んで
水底深く沈めてくれ
何事もなかったように

ことば

最後に
もう一度
固く 短く
希望について
語りたい

わたしは生き残り
ここまで来た

麦の穂や稲の輝きと
思ったものは
ひと風吹くと
この地の下に潜み続ける
ひとのいのちだった

ひとがひとを殺し続けて
出来た土地
道

たてもの
そこに
桜が咲く
菊がおう
ひとが生まれる

海の風が運んでくる
あれは
骨のぶつかりあう音
水に漂う
死んだひとたちの繰言

わたしはこたえようとしてきた
ともに語りたいたいと思つてやつてきた

死者よ この身にとまれ
と

しかし
わたしは

わたしの足を繰り出すしかない
死んだものは
よみがえることはない

長い時が経ち
生き残つたわたし
生き残つたもの
それが
希望である

短く
固い
希望ということばである
ひとびとの声が聞こえる
生と死の挟間から

砂の丘を下り
松の林をくぐり
海に出たい

海原は広がっているだろうか

ひとびとの声が聞こえる
生と死の狭間

短く
固い
ことばが残った

たなごころに握りしめ
腹の奥に据え
声に出す

はじめてのよう
この世にむかって
生き続けるいのちにむかって
声を出す

生き残り
行きついた

わたしのことば

固く
短い
ことば

希望